

「八月の光」再考

森 岡 力

〔 Ⅰ 〕

フォークナーが「八月の光」のタイトルの由来はアメリカ南部地方で古代からずっと八月に発生している特殊な光の現象のことで、Lena Grove と関連があると述べている。

In August in Mississippi there's a few days somewher about
the middle of the month when suddenly there's a foretaste
of fall, it's cool, there's a lambence, a luminous quality
to the light, as though it came not from just today but
from back in the old classic times ...
from Greece, from Olympus ...

1)

a lambence, a luminous quality to the light は Lena から発し、
何処まで届き、どんな役割を果しているのだろうか。

「八月の光」には Lena Grove, Joe Christmas, Gail Hightower の
主要な人物が登場する。人物の名称は字義通り解釈すると、それぞれ「森」
「キリスト」、「高塔」の意味である。Lena は自然のように大らかで永
遠で、Christmas は自己実現の追求の結果、詢教者のように虐殺され、
Hightower は書齋に閉じこもって、過去に想いを廻らしながら窓外を見
つめ、社会から隔絶している。Lena の大らかな明るいイメージと対照的

1) Cleanth Brooks, *William Faulkner, Yoknapatawpha Country*

(New Haven and London: Yale University Press) p. 375

に Christmas, Hightower の暗い行動が描かれている。

Lena は人間が自然と均衡を保って生活していた田園共同社会を, Christmas は神経症的アメリカ南部社会を, Hightower は南北戦争後のジェフソンの人々に共通した心情を反映しているとも言える。Lena の世界は Christmas の深い闇の世界に対する憧憬として描かれている。

Hightower は過去への幻想と形骸化した宗教に埋没していた自己を内観し, Christmas のアリバイを偽証するのが限界である。

本論は Joe Christmas, Lena Grove, Gail Hightower の人物像について分析し, 「八月の光」について考察することにある。

〔 Ⅱ 〕

〈 Joe Christmas 〉

人間は誰しもこの世に誕生した時は純真無垢で有り得ても死を迎える時はそうではない。Christmas の場合は人生を意識する以前からアメリカ南部社会が包含する矛盾に反応した結果非人間になる。Irving Howe によると Christmas の全経験は彼を封じ込める一連の壁に衝突するものであると述べている。Christmas は一連の壁に反応的憎しみで衝突している。

The entire experience of Christmas is that of dashing himself blindly against a series of walls which contain his movements and frustrate his desires. 2)

Christmas の人生を最初に混乱に陥し入れるのが祖父の Hines である。Hines はカルヴィニズムに我を忘れ, エリート意識に酔って恣意的に宗教を利用している insane でマゾヒスティックな老人である。Hines は Christmas を孤児院に預けた理由を次のように言っている。

2) Irving Howe, *William Faulkner, A Critical Study*

(Chicago and London: The University of Chicago Press), p.212

‘It’s the Lord God’s abomination, and I am the instrument of His will.’ (p.360)

Hines にとって Christmas は娘の不品行の結果生れた子供だから *abomination* であり、黒人でなければならなかった。Christmas を黒人として追いつめる妄想を実行に移す手段として Hines は孤児院の管理人になる。暖房炉室から Christmas を見張り、疎外感を Christmas に抱かせる。

‘Why don’t you play with them other children like you used to?’
‘Is it because they call you nigger?’ (p.362)

Christmas は黒人の庭師からも冷たく扱われ、白人、黒人の両方から疎外感を感じて自分の不明確な存在を意識するようになる。

孤児院の栄養士は若いインターンとの情事を Christmas が見ていたの
で情事が発覚することを恐れ、Hines と共謀し Christmas を黒人として片付けようとする。Christmas が黒人ではないかという疑惑から孤児院の院長は Christmas を MacEachern のもとに養子に出す。

MacEachern もプレスビテリアニズムに我を忘れ自我のない人物である。MacEachern は院長に MacEachern 夫妻のもとでは “ … he will grow up to fear God and vanity despite origin.” (p.13) と約束し、また孤児院から MacEachern 家への帰途、Christmas にも次のように言い聞かせる。

“ … For I will have you learn soon that two abominations are sloth and idle thinking, the two virtues are work and fear of God.” (p.135)

プレスビテリアニズムに自己を託している MacEachern の養育方法は人

間より神を優先し、人間的感情を無視したものであった。MacEachernは少年Christmasにプレスビテリアリズムの教義問答書を強制的に暗記させるために銀時計で機械的に時間を計り、暗記しない時は皮紐で折檻した。そのあとでこういう人物にありがちな罪悪感による心の不安を静めるために神に祈る。

MacEachern began to pray. He prayed for a long time, his voice droning, soporific, monotonous. (p.143)

MacEachernはChristmasの成長に応じて対応できないタイプの間で旧態依然とした態度で接し、Christmasの生命の発展をサディスティックに阻害する。ある夜田舎で催されたダンス・パーティーでChristmasとBobbyが踊っている時MacEachernはChristmasの後を“the wrathful and retributive”(p.191)が乗り移った様に追い、Bobbyに対して“*Away, Jezebel!*”, “*Away harlot!*”(p.191)と罵倒する。ここにおいてChristmasとMacEachernの関係は必然的に暴力的結末に至る。Hines, MacEachernとChristmasの関係は愛という生産的なものに根ざしているのではなく、それを否定しようとしている。HinesはChristmasの母親の行為をbitcheryと考え、MacEachernはChristmasの恋人BobbyをJezebel, harlotとののしっている。二人共人間性を否定するカルヴィニズムの影響が強くあらわれている。

Christmasはこの後十五年間放浪生活を続け、白人、黒人達の間で自己確認をしながらジェファソンにたどり着く。ここで出会うのがJoanna Burdenである。Hines, MacEachernのような男達と同じ位、これから述べるBurdenを初めとして栄養士、Bobbyの女達もChristmasの人間的発展を阻害している。栄養士、Bobbyは彼女達の急場を救う手段として、黒人の概念をChristmasに押しつける方法を用いている。

Burdenは名前の通り祖先の重荷に喘ぎ、それに終生拘束され、それから自己を解放することができない女性である。Burden家の人々はニュー

イングランドから政府の委任を受け、解放された黒人達を援助するためにジェファソンに来ていた。祖先の信仰はユニテリアニズムで Burden の祖父と異母兄弟の Calvin は黒人投票権問題が原因で Satoris 大佐によって射殺されている。ジェファソンでは Burden は北部人であり、黒人シンパであるのでアウトサイダーであった。Burden が四歳の時父親が彼女を Burden 家の墓地に連れて行き、そこで次のように彼女に言う。

‘You must struggle, rise. But in order to rise, you must raise the shadow with you. But you can never lift it to your level. I see that now, which I did not see until I came down here. But escape it you cannot. The curse of the white race is the black man who will be forever God’s chosen own because He once cursed Him.’ (p.240)

Burden は人間として、女性として生きようとするよりも黒人を救済し、白人の贖罪をする人間になっていた。Christmas との交際が始まると、二十年間詢教者のように人間性を否定してきた生活が急速に崩壊する。

At first it shocked him: the abject fury of the New England glacier exposed suddenly to the fire of the New England biblical hell. (p.244)

“Don’t make me have to pray yet. Dear God, let me be damped a little longer, a little while.” (p.250)

Christmas との関係を正当化し、Christmas を自分の所に引き留めておくために Burden は Christmas との結婚を考え、彼女に代って黒人救済の仕事をさせ、Christmas もまた黒人として救済しようとした。Christmas は Burden との交際が深まるにつれて次のように考える。

This is not my life. I don't belong here (p.244)

‘No. If I give in now, I will deny all the thirty years that I have lived to make me what I chose to be.’ (p.250)

Christmas が Burden から強制された黒人の役割を拒絶した時 Burden は自分と Christmas の魂を救済するために一緒に祈ることを強要する。Christmas がそれも拒否した時 Burden は狂暴な神の道具となる。

“I don't ask it. It's not I who ask it. Kneel with me.”(p.267)

Christmas の人間的発展を阻害する Burden の暴力と自己の発展を願望する Christmas の暴力の衝突により Burden は惨殺され、Burden 家は焼失してしまう。Burden 殺害後、逃走中の Christmas は自然の中で穏やかな気持になり、自分が求めつづけてきたものが単純に存在することであると認識する。それですらジェファソンでは Christmas にとって困難であった。

‘That was all I wanted,’ he thinks, in a quiet and slow amazement. ‘That was all, for thirty years. That didn't seem to be a whole lot to ask in thirty years.’ (p.313)

モッツタウンに行く通りがかりの馬車に揺られながら半生を振り返る。逃亡一週間の間 Christmas は内面的に成長している。しかし Christmas は彼を追いつめた circle の中に依然としていた。

Though during the last seven days he has had no paved street, yet he has travelled further than in all the thirty years before, and yet he is still inside the circle.(p.321)

Christmas は Burden 殺害によって非人間的、暴力的であるにしても彼の人間の意志を表明したことになり、彼の人間性を否定するものから自分を解放した。これから Christmas はどうしようと考えているのだろうか。白昼堂々とモットタウンで逮捕されてしまうのは、彼が三十年間悩みつづけた白人か黒人かという *cercle* から抜け出そうと考えているからである。黒人か白人かという概念を越え世界の人間になろうとしている。

Hines と異なり、Hines 夫人は肉親の愛情を持ちあわせているので、留置場で Christmas は Hines 夫人による Hightower の話を信じた。そして Hightower が Christmas の心の中に入り得るまでに内面的に深さを増していたから、Christmas が Hightower の家で死を迎えることが何処よりもふさわしく思われる。Cleanth Brooks は Hightower と Christmas の関係を次のように説明している。

Whatever Joe's motives were, it is proper symbolically, of course, that he should meet his death in Hightower's house, for as Hightower is to realize, he, like Joe, is a murderer and exile from the human community. The two men are brothers. 3)

Christmas, Hightower が murderer, exile であるにしても、Christmas が Hightower と異なる点はその原因が自己の外部にある。そして外部の物に対する反応の激しさである。

保安官の手から Hightower の家に逃亡し、そこで Grimm に相対する。Grimm は白人の優越性とアメリカ国粋主義に心酔し、正常な自我を持ち得ない精神的かたわな青年である。彼は第一次世界大戦に参戦できなかったことに劣等感を持っていたことが無意識的・衝動的行動の原因と思われる

3) Cleanth Brooks, *William Faulkner, The Yoknapatawpha Country*

(New Haven and London: Yale University Press), p. 377

る。Christmas は死ぬまで苦悩しながら自分自身になろうと思いつけ、自由な気持で走り出したかと思うとすぐにメカニカルな人間 Grimm に虐殺されてしまう。ジェファソンにおいて一人の人間が真に、自由に、自分自身になり得るには余りに多く、この実現を阻害するものが存在し、Christmas は人間らしくなろうとすることによって、ますます非人間になってしまった。

〈Lena Grove〉

Lena は自然の活動と同じように悠久の旅をしているように思われる。壺の表面を果てしなく動いていて、前進しない物のようである。

… backrolling now behind her a long monotonous succession of peaceful and undeviating changes from day to dark and dark to day again, through which she advanced in identical and anonymous and deliberate wagons as though through a succession of creak wheeled and limpeared avatars, like something moving forever and without progress across an urn. (p.5)

Irving malin は彼女の cycle は the cycle of the seasons, the days, the flow of past into present into future と一致すると述べている。⁴⁾ 彼女は自然の運行そのものである。

物語冒頭、身重の体で Lena がジェファソンに捜しに行く Lucas Burch と彼女の関係は彼女の貞節だけが二人の間を結びつけている。そして Lena は普通の人間が考えれば信頼がおけないと判断するような Lucas に貞節を守り通す。アラバマに身重の Lena を残して何の連絡もしない無責任な男 Lucas は必ずジェファソンで彼女を待っているはずだと思っている。

4) Irving Malin, *William Faulkner : An Interpretation*,
(New York : Gordian Press, 1972), p.62

“I reckon a family ought to all be together when a chap comes. Specially the first one. I reckon the Lord will see to that.” (p.18)

LucasにLenaと家庭を築く気が全然ないことがわかってても別に憤りを感じていない。

Then only did she move, and then but to sigh once, profoundly. “Now I got to get up again,” she said, aloud. (p.409)

Irving HoweはLenaをthe good unruffled vegetableとしている。⁵⁾ Lenaには疑ってみたり、状況を判断する能力に欠けている。

Lenaが羊のように無邪気であるためにジェファソンの社会は健全に作用している。Hightowerがジェファソンから疎外され、Christmasが接触する人毎に摩擦を起すのに比較するとLenaは人々とsmoothに接触し、人はうさんくさい目つきをしながら彼女の世話をしてしまう。Armstidは身重のLenaに不審を抱くけれども彼女を馬車に乗せ自分の家に泊める。Armstid夫人は卵を売ってためたへそくりまで与えてやる。翌朝ArmstidはVarnerの店まで彼女を馬車に乗せ、そこでジェファソンまで行く馬車に相乗りさせてやるように頼む。

“This here is Miz Burch. She wants to go to Jefferson. If anybody is going in Today, she will take it kind to ride with them.” (p.20)

社会から孤立して静かな生活をしている男達はLenaがジェファソンに

5) Irving Howe, *William Faulkner, A Critical Study*,

(Chicago and London : The University of Chicago Press), p.205

着いてから彼女と接触することにより、限界はあるにしても社会的・動的に変化している。LenaがLucasを捜してジェファソンに到着した日に製材所でByron Bunchに会う。Byronは土曜の午後たった一人で工場で働き日曜は田舎で聖歌隊の指揮をしている模範的な青年である。

If there had been love once, man or woman would have said that Byron Bunch had forgotten her. Or she (meaning love) him, more like _____ (p.42)

しかしLenaに会い恋に落ちてからは、いつもの行動様式が急変し、Lenaの世話を介々しくするようになる。ByronはHightowerから一組の男女の間に他の男が介入することになるのだからLenaの世話をやめるように注告されても頑として聞こうとしない。

"You don't need my help. You are already being helped by someone stronger than I am." (p.291)

Byronは今までの愛のなかった消極的生活から積極的生活に変化する。Lenaの援助をしたいというByronの強い信念に動かされて、HightowerまでしぶしぶLenaのお産の手伝いを買って出る。

"And you will let me know? If anything comes up. If the child —— Have you arranged for a doctor?" (p.300)

Lenaのお産の介添えをしたあと、Hightowerは次のようにLenaに対する感慨を述べている。

She will have to have others, more remembering the young strong body from out whose travail even there

shone something tranquil and unafraid. More of them.

Many more. That will be her life, her destiny ... (p.384)

Lena の逞しい体から something tranquil and unafraid と豊饒さを感じとり、それが彼女の宿命であると考えている。Hightower は Burden 屋敷の焼け跡に立ち、Burden と Lena を比較して Burden に対する印象を次のように述べている。

‘Poor, barren woman. To have not lived only a week longer, until luck returned to this place. Until luck and life returned to these barren and rined acres.’ (p.385)

Hightower は Burden を哀れな、不毛の女性であると同情的に見ている。二人の女性の特徴即ち、不毛性と豊饒性が鮮やかに比較されている。

Lena は Christmas が虐殺される頃、男の子を出産したり、Hines 夫人が Lena と Milly, Christmas と Lena の子供を混同してしまうので、一見 Christmas の死を通して生がジェファソンに訪れるかのように見える。しかしこれは構成上であって本質的には生の復活がもたらされたとは言えない。Lena は Christmas と一度も会っていないし、また Christmas を救う能力を持ち合わせていない。

二十一章において家具商が Lena と Byron の二人連れに出会い、彼には Byron と共に Lena が comical な人物で、彼女が Lucas を捜す旅を続けるだろうと考えている。

... how they might travel on like this from one truck to another and one state to another for the rest of their lives and not find any trace of him, and her sitting there on the log, holding the chap and listening quiet as a stone and pleasant as a stone and just about as nigh to

being moved or persuaded.

(p.474)

LenaはLucasに約束を破られ、彼を再び見つけることができる望みは薄いにもかかわらず、Lucasを捜す旅を続け、ByronはLenaと結婚する可能性がなくても従者のように彼女と一緒に田園風景の中で旅を続ける。

〈Gail Hightower〉

Coughlamが南北戦争後、オックスフォード(ジェファソンのモデルの町)の人々は無気力になり、南北戦争前、南北戦争中の出来事を賛美したと説明している。

The glorious events of the old days, especially the days during and before the war, loomed in the misty distance pure, brave, and out of human scale, ... 6)

Hightowerも現実を忘れ祖父の美化された英雄的行為に夢中になっていた。Hightowerは父、母、黒人女のphantomと祖父のghostの影響の中で育った。父の信仰の為、母は二十年近くも病身で、父は現実の存在だけに彼に恐怖を与え、彼とは異質の存在であった為に、美化された祖父の英雄的行為が少年Hightowerに夢を与えた。乳母の黒人女はそれを拡大した。

No horror here because they were just ghost, never seen in the flesh, heroic, simple, warm, while the father which he knew and feared was a phantom which would never die. (p.452)

6) Robert Coughlam, *The Private World of William Faulkner*,

(New York:Cooper Square Publishers, Inc., 1972), p.87

青年になっても過去の幻想に夢中になることによってHightowerは不人間になり、現実の中々もどれなくなる。Hightowerの真実であり、人生の究極の目標はジェファソンに行き祖父の霊と合一することにあった。だから彼の心の中に育っていたheroicな過去の幻想の中に神が導いて下さると考えて、最初神学校に入り、牧師になり、祖父が騎馬に乗って走り去った時と同じ雰囲気のあるジェファソンを任地として選んだ。

妻との結びつきについても一方的に彼が作り上げた幻想に基づいて妻を見ていたのに対して、彼女は人間的感情から彼との結婚を考えていた。だから彼女との結びつきは生身の人間同士の結びつきではなく、生の中に死を持ち込んだようなものである。

But to him it was not men and women in sanctified and living physical intimacy, but a dead state carried over into and existing still among the living like two shadows chained together with the shadow of a chain. (p.454)

Hightowerは教会、教区の人々、妻を疎そかにし、幻想と宗教を一緒にしたために教会、教区の人々の期待を裏切り、妻にはスキャンダラスな情死をされてしまう。

現在では教区の人々から追放され、Byron以外とは誰とも会うこともなく町の片隅でひっそり暮している。ジェファソンから追放されることと引き換えにHightowerはグロテスクな目的を獲得して、夕方になると窓辺で過去の幻想に浸っている。

... he is waiting for that instant when all light has failed out of the sky and it would be night save for that faint light which daygranaried leaf and grass blade reluctant suspire, making still a little light on earth though night itself has come. Now, soon, he thinks;

soon now.

(p.55)

このような Hightower は Byron によって Lena, Hines 夫人, Christmas と接触することになる。Byron はたびたび Lena のことを Hightower に相談にくるけれど、Hightower は掛り合いになることをさげようとする。

… I just wanted peace; I paid them their price
without quibbling. (p.293)

Byron の強い意志に免じて Lena の子供を医者に代って取り上げたあとで感動を覚えている。

… there goes through him a glow, a wave, a surge of
something almost hot, almost triumphant. (p.382)

Lena との接触が Hightower の生活をも確かに変化させるきっかけにはなっている。

He moves like a man with a purpose now, who for twenty-
five years has been doing nothing at all between the time
to wake and the time to sleep again. (p.383)

しかし本質的変化をもたらしたかどうか疑問である。

Hightower は他人が打ち明け話をしてみようと思うだけの人間的能力を持っているのに、他人のために強い行動はできない。Byron を介して Hines 夫人はたった一日でも良いから昔の無垢のままの Christmas に会いたいと Hightower に打ち明ける。

But if folks could maybe just let him for one day. Like

it hadn't happened yet. Like the world never had
anything against him yet. (p.367)

現在に対して行動する時、Hightowerは苦悶を感じて次のように言っている。

"It's not because I can't, don't dare to," he says; "it's
because I wont! I wont! do you hear?" (p.370)

Hightowerは現在において行動しない為に無の状態にあると言える。だから他人を写す鏡となっている。ジェファソンの人々を根は good people, Lenaは豊饒な女性, Burdenは barren woman, Christmasは poor mankindとして見ている。

HightowerはChristmasがGrimmと追手に追われてHightowerの家に逃走してきた時, Christmasの境遇に同情してChristmasの為に偽りのアリバイを述べ精一杯の良心を表明している。

"Listen to me. He was here that night. He was with me the
night of the murder. I swear to God —— " (p.439)

Christmasに殴打された意識朦朧とした頭でグロテスクな自分の過去を客観的に省みて、教会、聖職者を批判している。

'They did their part; they played by the rules' he thinks.
'I was the one who failed, who infringed. Perhaps that is
the greatest social sin of all; ay, perhaps moral sin.' (p.461)

… : that which is destroying the church is not the

outward groping of those within it nor the inward
groping of those without, but the professionals who
control it and who have remoned the bells from its
steeple. (p.461)

Hightowerはグロテスクな目的の為に形骸化した教会を受け入れ、それに奉仕してきたのだと考え次のような境地に到達する。

And I know that for fifty years I have not even clay:
I have been a single instant of darkness in which a
horse galloped and a gun crashed. (p.465)

Cleanth BrooksはHightowerは物語の終りで彼が殆んど実人生を生きなかったという bitter realization に達すると述べ、最後に self-centered dreamから抜け出たと説明している。⁷⁾しかしHightowerは自分の過去を振り返り、内省する程変化していても過去の幻想から自由でないと思われる。

... he still hears them: the wild bugles and the clashing
sabres and the dying thunder of hooves. (p.467)

[III]

Lenaの a lumbence, a luminous quality to the lightはByronからHightowerに、HightowerからChristmasに達していても希薄である。その理由として、一つにはChristmasの闇が深すぎ、最後までHightowerは過去の幻想から自由ではない。二つにはLenaが人間の観点からみるとHightower, Christmasより劣る。

7) Cleanth Brooks, *William Faulkner, The Yoknapatawpha Country*,
(New Haven and London: Yale University Press), p.70

人類はアダムとイヴが禁断の木の実を食べて以来、樂園を追放されたように Hightower, Christmas は conscious という木の実を食べている為に滅びてしまう。一方 Lena のような強靱で女性の本能で生き抜いていく姿には不安感はなく、かえって憧憬を感じる。

Irving Howe は conscious の概念を用い、Lena は sub-conscious な人間だと主張している。⁸⁾ Lena が sub-conscious な人間だとすれば Hightower, Christmas はそれぞれ過去の幻想、現在に対して over-conscious な人間と言える。Hightower は余りに多くの矛盾を背負い込まされた人間 Christmas に役に立たないけれど同情は可能である。

Irving Howe はこの物語に a well-earned complication of irony を認めなければならないと述べている。⁹⁾

Christmas は現在に対して over-conscious であるために、神経症的なアメリカ南部社会に反動的な憎しみでもって対立し、非人間的になり、最後に Grimm に虐殺されてしまう。Christmas には救いがない。Lena の田園的イメージの中で妥協を許さないが故にアメリカ南部社会の矛盾と対決し、自己追求した Christmas の悲惨さが浮き彫りされている。フォークナーの作品「八月の光」という限定された観点からは、Christmas の死によってジェファソンに真の生がもたらされてはいないし、Hightower には現在に対する行動力が欠如しており、Lena から倫理的価値はもたらされていない。

形式的には Lena を一章と二十一章に登場させることによって統一をもたらししている。しかし Lena によって作品を統一しようとしたフォークナーの意図が十分果たされているとは言えない。

8) Irving Howe, *William Faulkner, A Critical Study*,

(Chicago and London: The University of Chicago Press), p.206

9) Irving Howe, *William Faulkner, A Critical Study*,

(Chicago and London: The University of Chicago Press), p.206

参照テキスト

Faulkner, William. *Light in August*.

(London : Chatto & Windus, 1968)

参照文献

Howe, Irving. *William Faulkner, A Critical Study*

(Chicago and London : The University of Chicago Press)

Brooks, Cleanth. *William Faulkner, The Yoknapatawpha Country*

(New Haven and London : Yale University Press)

Malin, Irving. *William Faulkner : An Interpretation*

(New York : Gordian Press, 1972)

Coughlam, Robert. *The Private World of William Faulkner*

(New York : Cooper Square Publishers, Inc., 1972)

エーリッヒ・フロム 日高六郎 訳	自由からの逃走	東京創元社
林 信 行 著	アメリカ文学論考	北 星 堂
大 橋 健三郎 著	危機の文学	南 雲 堂
花 本 金 吾 著	フォークナー研究	学 書 房
リチャード・チェイス 待鳥又喜 訳	アメリカ小説とその伝統	北 星 堂